

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00276

研究課題名（和文）医療記録からみる日本医療の「近代化」過程 医療費・家族・診療録

研究課題名（英文）The Modernization Process of Medical Practice in Japan: Medical Expenses, Families, and Medical Records

研究代表者

廣川 和花（Hirokawa, Waka）

専修大学・文学部・教授

研究者番号：10513096

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、各地に残された医師の診療記録を用いて、日本の地域医療の近代化の過程を明らかにした。その際、医療費支払い・家族内の医療受給・医療的所見という3つの観点を重視した。まず医療費の支払方式と支払率、および家族の医療受給と医療費支払いの2点については、明治期を通じて近世的な慣行を多分に引き継いでいる傾向が読み取れる。他方で、医療記録に記された医療的所見からは、明治期に供給された医療の質の多様性と新たな医学に対するキャッチアップへの指向を読み取ることができた。したがって、地域医療の近代化は、医療の内容面が支払いの単位に連動した支払い方式に先行して進行したといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近世後期から明治期において、地域医療レベルの日本の医療がどのように「近代化」したのかを、各地域に残された歴史資料を読み解くことによって明らかにした。医師・患者・病気の三者の関係、医療の接近可能性・購買可能性・質といった要素に注目して、近世後期～明治期の地域医療における医療費の支払方式、家族内の医療受給、供給される医療の内容という3点について主に考察した。その結果、この3点それぞれの「近代化」の過程と、医療の内容面が先行して地域医療の「近代化」が進行していった様相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study utilizes the historical medical records of physicians in several regions of Japan to identify the process of modernization of medical practice in Japan's regional health care systems. In doing so, this study focused on three perspectives: payment for medical care, healthcare utilization by family members, and quality of medical care provided by different physicians. First, the procedures for payment of medical expenses by patients and access to medical care by family members remained the same as in the early modern period throughout the Meiji era. On the other hand, medical records reveal the diversity in the quality of medical care supplied during the Meiji period and the orientation of physicians toward catching up with new medicine. Thus, in the process of medical modernization, changes in the quality of medical care occurred first, rather than in payment schemes linked to units of payment.

研究分野：近代日本医学史

キーワード：地域医療 医学史 診療録 医療アーカイブズ

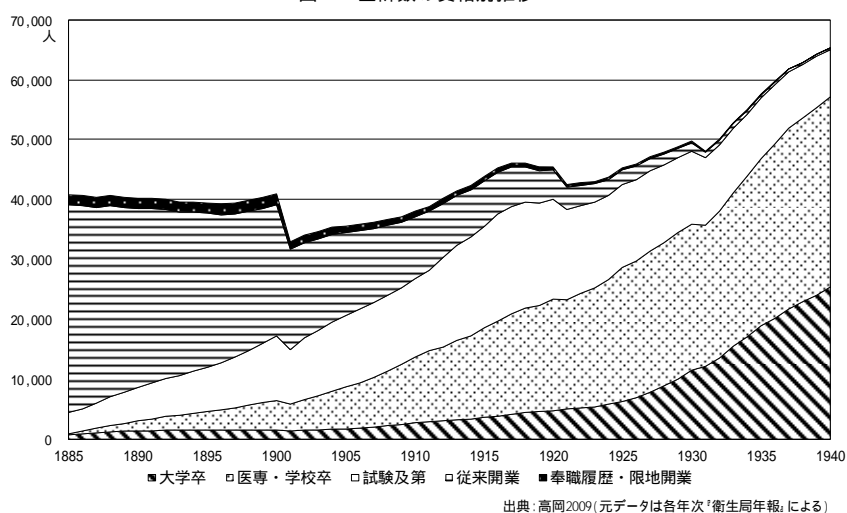
## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 「医療の近代化」過程解明の課題

日本の医学・医療の「近代化」過程に関する歴史研究は、これまでそのほとんどが大学における「西洋医学教育の移入」に焦点を合わせて行われてきた。すなわち、幕末のオランダ人軍医からの西洋医学伝習を端緒とし、1869年に大学東校（のちの東京大学医学部）でドイツ医学の採用が決定され、招聘されたドイツ人教師が西洋医学教育に当たったことを、日本医学の「近代化」の主たる成功要因とみなす歴史像である。この傾向は近年の研究においても根強いが、実際には、明治期を通じて大学で直接ドイツ人から医学を学んだ医師（医学士）は、医師全体から見ればごくわずかであった。医師の大多数は西洋医学の学修を免除された「従来開業医」であり、明治初期段階で医師全体の8割以上を占めていた。医専・学校卒の医師、および学校で学ばずに西洋医学知識を習得した「試験及第医」が「従来開業医」に置き換わるまでには長い年月を要した（図1）。つまり明治期、地域医療を担う医師の大半にとって、生涯を通じて、大学の医学教育は遠い存在であった。従来開業医は各自が自力で技能向上や近代的医業経営を模索せざるを得ず、新たに医業に就いた新世代の医師たちも、西洋医学に対応した医業経営という未知の領域に挑戦しなければならなかった。したがって、医療の現場における「医師の近代化」には、さまざまな現実的困難がともなったと考えられる。

図1 医師数の資格別推移



#### (2) 医療記録に即した地域医療実践の解明の必要性

そこで、大学医学部における「医学教育の近代化」のみに着目するのではなく、また限られたエリート医師だけを対象にするのではなく、地域に生きたごく一般的な医師の医療実践と試行錯誤に着目し、日本における「地域医療の近代化」の内実そのものを検討する必要がある。各地域の医家の資料群からは、各医療者が医業経営のためにどのような医療記録を作成し利用していたのかを具体的に知ることができる。そしてそれらの形式は、医療実践そのものに規定されていること、同時に全国的な医療記録の共通フォーマットへの収斂が起きていることがうかがえる。さらに、医療供給側が作成した資料からであっても、社会経済的条件やジェンダーに規定される要素をふまえて患者の受療行動や家族内の医療受給の状況を知ることが、十分可能である。

#### (3) 先行研究とその課題

以上の研究状況をふまえ、本研究は、各地域に残された具体的な歴史資料の構造から地域医療の諸要素を総合的に再構成し、近世との連続と断絶に注目して地域医療の「近代化」をとらえ直していく試みである。地域医療レベルの近代日本の医療実践については、これまで「医療の近代化」の観点からの研究対象となることはほとんどなかった。コレラなど疫病や天然痘流行時の種痘普及など、公衆衛生の観点からはすぐれた研究がなされてきたが、それらはいわば非常事態への緊急対応としての防疫、もしくは特定の医療技術の実践であって、必ずしも日常的な医療行為の指標とはならない。また、従来の研究の多くが、近代に初めて導入されるがゆえに公衆衛生は「近代的」なものであるとの前提に立っており、日常の医療の内実の「近代化」がいかになされていくのかという視点は持たれてこなかったといえる。

### 2. 研究の目的

#### (1) 地域医療の「近代化」分析のための三要素

本研究では、地域医療の「近代化」の実態を知る指標となる三要素に注目し、それが個々の医者により作成された医療記録の構造と有機的連関を持つことに留意しながら、医者視点・患者視点の双方向から「医療の近代化」の過程をとらえなおすこととした。三つの要素とは、診

療形態と連関した医療費支払いの構造、 家族内での医療受給状況、 診療録（カルテ等）の医学的記述である。すなわち、ある診療圏内での 往診と在院診療を組み合わせた医療供給に対して、家族（場合によっては、店や地主などの経営体）を単位とする医療受給とそれへの支払いの構造が存在し、 それに規定された家族内での医療受給状況が生じる一方で、 個々の患者に対して医療的な所見が記録される。つまり、ここからは個々人の生存を保障する支払い主体としての家や経営主体と、病む身体を持つ個人を、重層的・複合的に把握することが可能となる。さらに、それぞれの要素に関して、時系列的变化や技術的転換を読み取ることができる。このように現在に残された医療記録から、医師と患者の間に成立していた医療実践がどのように再現できるのか、そして人々の日常の中の地域医療の実態が具体的にいつどのように「近代化」を遂げたといえるのかを問い、実態に即して明らかにすることとした。以下に、各要素に即して具体的な研究目的を示す。

#### 診療形態と連関した医療費支払いの構造

診療形態について、先行研究では、近世以来の往診を柱とする医療への言及は断片的な記述に止まり、医療記録との対応関係や医療受給の構造には触れられていない。医療費支払いに関しては、明治期以降も近世的な医療費つけ払いの慣習が広く残存したことは指摘されているが、明治期に個々の医家が具体的にどのように医療費の設定と徴収を行い、経営を成立させていたのかについては、ほとんど研究がなかった。したがって、近世的な診療形態と医療費支払いの構造が、近代的な医業経営にどのように接続され、そこにはいかなる連続と断絶があるのかを明らかにする必要がある。

#### 家族内での医療受給状況

消費の観点からは、家計の医療費支出分析がなされている。これに対し本研究は、医療供給側が数百に上る顧客（患者）を家単位で把握し記録した資料から検討するため、ある地域内での家単位・家族構成員ごとの医療受給状況を丸ごととらえることが可能となる。疾患が個人単位（近代的）で把握される一方、支払いは家や経営主体単位（近世的）でなされる点も注目される。そこで、各家内のジェンダーや社会経済的状况により、どのような場合に医師による医療を選択し、どの程度の支出をするのか、また医療費未払いがどのような頻度・ケースでみられるのかについて検討する。

#### 個々の患者に対する医療的な所見

診療録（カルテ）と処方箋からは、医療者のもつ医療知識や疾病分類概念とその「近代化（西洋化）」の過程をつぶさに知ることができる。一方で、その地域において患者はどのような場合に受診行動をとるのか、その場合の受診形態や受診頻度、そして医療費支払いがどのようになされるのかを、他の医療記録と合わせて総合的に明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 第1段階：既存資料の基礎的分析と所在確認済み資料の調査

研究開始の時点で、すでに画像等を入手済みであった史料を用いて、具体的な検討対象とした。まず、栃木県内・福井県内に残された、幕末～明治後期の在村医（従来開業医）や大学・医学学校卒医師による、地域医療実践の記録を用いて検討した。これらを比較し、医療記録の基礎的構造把握を行った。加えて、所在確認済みの医家文書群・娼妓健康診断関係史料の調査を行い、古書店から購入した医家史料等も加えて、本研究の分析対象を確定した。

#### (2) 第2段階：医療記録の類型化と医療実践の再構成

収集した資料群に含まれる各種医療記録を、それぞれが作成された背景や必要性（医療費徴収・投薬・往診・検診・検死・出生等の各種届出・医療・公的医療保障など）の観点から類型化し、それに即した形で、当時の地域医療の現場で行われていた実践内容を再構成した。特に、本地域医療の「近代化」の指標となる三要素が現れてくる文書を、それぞれの資料群の中でも中心的に分析した。

#### (3) 第3段階：地域医療の三要素の検討

複数の医家の医療記録を類型に当てはめて、それぞれのケースにおける医療の「近代化」指標の三要素を比較検討し、医療の「近代化」の進行過程において、三要素の示す地域的な差異と共通点、およびその理由や背景を、医学史的な観点から、同時に政治的・経済的・社会的文脈の中に位置づけながら考察した。

### 4. 研究成果

#### (1) 地域医療供給の社会史的考察

本研究では、上記の目的を達成するために、日本近代における地域医療の主要なアクターである医者・患者・病気の三者のつくる「ヒポクラテスの三角形」のとらえ方を用い、また地域医療「普及」の指標として、医療の購買可能性（affordability）・医療への接近可能性（accessibility）・医療の質（quality）の三つの視角を用いて分析した。すなわち近世・近代

移行期日本の地域医療のなかで、医者・患者・病気の三者がどのような変化を経たのかを検討し、本研究課題の目的にせまることとした。

明治維新後に「医師の近代化（西洋化）」がはかられ、漢方医から西洋医への入れ替えが進行するものの、その転換の速度は緩慢であった。一般的な地域医療の場においては、維新前から開業しそのまま医業の継続を認められた「従来開業医」が多数を占め、近世から近代へ移行によって医療の「質」が急激に変化することは少なかったといえる。西洋医学教育を受けた医師数の増加も漸進的であり、医師の都市部への偏在がすすんだために、地域によっては近代化にともなって実質的な医師数は減少することもあった。全体的にみて、医師数の観点からは、医療への「接近可能性」は大きくは変化しなかった。

第二に、個々の患者の知識レベルや医療に対する認識の変化、医療購買行動の変容は、より漸進的なものであったとみられる。医療の「購買可能性」を決定する経済的な条件は、景気変動などには左右されるものの、急激に変化したとはいえない。

しかし第三に感染症の構造的変化の影響は大きかった。近世以前に日本列島社会に定着していた天然痘のような風土病に対しては、人々は一定の対応策の蓄積と免疫（種痘によって獲得されたものを含む）を有していたが、近世後期以降、都市を中心にインフルエンザや麻疹の大流行がみられた上、コレラという新たな疫病が世界的流行へと拡大し、これを背景として日本列島においても近世後期から明治前期に繰り返し大流行した。人々はこうした新たな疫病に対して、それまでの疫病経験をリソースとして立ち向かわざるをえなかった。流行する疫病そのものの変化という疫学的状況の激変もまた、当該期の地域医療を大きく規定した。

さらに近代における大きな構造変化として、「三角形」の外部から国家レベルの医療政策の力が加わるようになる。近世においては種痘を含め幕府による全国統一的な医療政策はほぼ存在していなかったため、ここには明らかに断絶が認められる。近代移行のコレラをはじめとする急性感染症対策や種痘に代表される公衆衛生政策、医療職の国家資格・医学教育制度などの導入は、三角形の全体に複合的に作用し、地域医療のあり方を変容させていった。

## （２）三要素の検討

以上のような状況下で、近世・近代日本における地域医療における診療形態と連関した医療費支払いの構造は、多分に近世の慣行を引き継ぐものであった。受診と支払いの手順は通例、まず往診もしくは投薬の依頼が、書状の送達や家族が直接呼びに来るなどの形で行われる。往診後に医師から患者へ医療費の請求がなされ、益もしくは歳末に患者が医師宅へまとめて持参するというものである。近世後期以降、比較的社会が安定している時期には、患者が比較的円滑に支払いを行うが、疫病流行や飢饉などにより地域社会全体の健康が脅かされることで患者数が閾値を超えると、回収率が低下する傾向がみられた。しかし医療費の回収率が低下しても医療供給は継続されており、地域医療の供給は、時には村落共同体の扶助機能の一部という性格を有することもあった点が注目されよう。

次に 家族内の医療受給状況に関しては、医師の側からみるとあくまで医療は「家」単位で供給されており、往診時には家族内の複数のメンバーの治療をまとめて行っているケースも多々見られた。その場合、小児-その母、母-その子である小児、老父/母-他のメンバー、というように、中心的な診療対象に付随して他の家族の診療が行われる傾向が看取でき、単純なジェンダー差や年齢階梯による家族メンバー内の優先順位は全体的な傾向としては見いだされなかった。つまり医療供給と医療費支払いはともに「家」単位でなされており、そのことが医療のあり方をも規定していたといえる。

最後に在村医（従来開業医）の診療録（カルテ等）の医学的記述には、明治期を通じて大きな変化はなく、1890～1900年代にかけて日本社会全体でみられた医療の近代化・西洋化に対応していたとはいいがたく、当該時期に出自の異なる医師の提供する医療の「質」には、大きな隔たりがあった。ただし、明治後期の在村医の診療記録には、西洋医学の病類概念の導入や病名付与が見られ、キャッチアップの努力がなされていたことは注目される。

以上のように、日本の地域医療の「近代化」は、医療の内容面（質）が、支払いの単位（家）に連動した医療費支払い方式に先行して進行したといえる。

## （３）「水平的アプローチ」・「垂直的アプローチ」による成果

本研究では、地域医療の社会史に「水平的アプローチ」を適用して分析した。単一の疾病を対象とした「垂直的アプローチ」の歴史研究に対し、「水平的アプローチ」では、過去の社会における広範な病気と健康の問題を検討する。しかし、本研究では、公衆衛生としての種痘伝播や、慢性感染症である梅毒やハンセン病に対して、一部「垂直的アプローチ」を用いて分析を行った。それは、地域社会における個別の医療技術が実現されうる基盤的条件としても、地域医療をとらえることが可能であるためである。本研究で扱った史料中には、在村医の地域医療実践の一部としてこうした個別の医療技術や診断の事例を多く見いだすことができた。

そこで本研究としては、まず近世・近代日本における種痘に対して、次のように論点整理を行った。第一に、近世段階で種痘の普及を主導する「主体」による分類が挙げられる。種痘の実施主体には、藩が主導して所領内の住民を対象に行う型と、多くは蘭方医たる在村医が中心となり一定地域内の住民を対象に行う型、その両方の事例がみられる。公儀による全国的な医療政策がほぼ存在しない近世段階で種痘を藩レベルでの公衆衛生政策や人口政策の萌芽として位置づけ

ることができるかどうかが焦点となる。第二に、「誰が」種痘の費用を負担するのが問題となる。直接の受益者たる被接種者とその家なのか、藩や医師などなのか。加えて藩主導の場合には政策の「慈恵」性の強調や強制力がみられたのかということである。そして第三に、こうした近世段階での実施主体の違いが、明治以降の種痘行政にいかなる連続と断絶を生じさせているのかが問われよう。本研究では、このように種痘を近世から近代へと続く長期的な「医療の近代化」の重要な一要素として位置づけることを提言した。

次に、明治期には、ハンセン病の治療に対しては通常の地域医療の関与は小さいものの、明治末期以降の療養所収容手続きにおける在村医の法的な位置づけとその実際の関与は重要性を持っていたことが明らかになった。

対照的に、梅毒は地域医療の中で大きなウエイトを占めており、診療記録を分析した結果として、とりわけ遊廓を内包する地域社会において、娼妓とその客に止まらず、地域社会全体が高い梅毒罹患のリスクに曝されていたことを明らかにすることができた。くわえて、娼妓に対する健康診断の実施過程や制度的な位置づけを明らかにすることによって、近世・近代日本の性売買をとりまく構造の解明に寄与した。近年の遊廓社会史の研究動向においては、いわゆる「芸娼妓解放令」以降、実態としては娼妓となる女性の人身売買が継続されながらも、それがいかにして「自由意思」という建前の下で近代的な抑圧や搾取の形をとるのかということに焦点が合わせられている。性感染症予防を目的とする強制検査の制度は、近世遊廓には存在せず、近代公娼制において付け加えられたあらたな構成要素であった。娼妓の健康診断の実態を知ることが、近世に比べたときの近代公娼制の特質をより明確化することにつながるため、本研究は遊廓社会史研究にも一定の貢献をなしたといえよう。

以上のように、「水平的アプローチ」に加えて「垂直的アプローチ」をとることで、本研究では地域医療の近代化という課題に対して、豊富な視角からせまり、あらたな論点を提示することができたといえる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 308
2. 論文標題 歴史資料の展示を通じて歴史を展示すること 国立歴史民俗博物館企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」の経験から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 科学史研究	6. 最初と最後の頁 399-405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 248
2. 論文標題 大正期における娼妓の稼働状況と健康 山形県米沢市福田遊廓「娼妓健康診断簿」の分析から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 225-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 906
2. 論文標題 書評と紹介 月澤美代子著『ツベルクリン騒動 明治日本の医と情報』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 106-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 69(3)
2. 論文標題 書評 青木歳幸、W・ミヒエル編『天然痘との闘い 【中部日本の種痘】	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本医学雑誌	6. 最初と最後の頁 350-351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 308
2. 論文標題 歴史資料の展示を通じて歴史を展示すること 国立歴史民俗博物館企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」の経験から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 科学史研究	6. 最初と最後の頁 399-405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 248
2. 論文標題 大正期における娼妓の稼働状況と健康 山形県米沢市福田遊廓「娼妓健康診断簿」の分析から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 225-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 906
2. 論文標題 書評と紹介 月澤美代子著『ツベルクリン騒動 明治日本の医と情報』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 106-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 69(3)
2. 論文標題 書評 青木歳幸、W・ミヒエル編『天然痘との闘い 【中部日本の種痘】』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本医史学雑誌	6. 最初と最後の頁 350-351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 33(2)
2. 論文標題 「隔離」と「療養」の間で コロナの時代に考える近代日本のハンセン病史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 235
2. 論文標題 明治後期～大正期日本の梅毒罹患と地域社会 栃木県塩谷郡喜連川病院の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 463-499
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 243
2. 論文標題 主に「医療の社会史」の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 14
2. 論文標題 伝統社会の生存システムと医療の近代化 : 栃木県塩谷郡の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 年報近現代史研究	6. 最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 廣川和花	4. 巻 109
2. 論文標題 「隔離」と「療養」を再考する： COVID-19と近代日本の感染症対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 235-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34360/00012448	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 247
2. 論文標題 ハンセン病歴史研究の新地平を切り拓く 本書の意義と課題」(書評：松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 48(7)
2. 論文標題 ハンセン病「隔離」とは何か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 163-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Waka Hirokawa	4. 巻 75(2)
2. 論文標題 Book Review: Kingdom of the Sick: A History of Leprosy and Japan by Susan L. Burns	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Monumenta Nipponica	6. 最初と最後の頁 345 - 349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1353/mni.2020.0030	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 241
2. 論文標題 医療の<近代化>と施療・救済の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 15 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 「隔離」と「療養」の間で コロナの時代に考える 近代日本のハンセン病史
3. 学会等名 第48回日本保健医療社会学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣川和花, 高野弘之, 野上玲子, 松岡弘之
2. 発表標題 明治40年法律第11号「癩予防ニ関スル件」(1907年)下での九州療養所入所者の家族関係の考察
3. 学会等名 第95回日本ハンセン病学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野上玲子, 廣川和花, 高野弘之, 松岡弘之
2. 発表標題 開所期九州療養所入所者の救護費徴収に関する一考察
3. 学会等名 第95回日本ハンセン病学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 書評 飯田直樹著『近代大阪の福祉構造と展開』：主に「医療の社会史」の観点から
3. 学会等名 部落問題研究所書評シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 医療史から読み解く性売買 大正期喜連川病院・米沢福田遊廓の史料から
3. 学会等名 シンポジウム「幕末から近代における性の売買」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 高岡報告・佐藤報告へのコメント
3. 学会等名 同時代史学会2021年度大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本における感染症史研究の現状と展望
3. 学会等名 第21回日韓歴史家会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 伝統社会の生存システムと医療の近代化 栃木県塩谷郡の事例から
3. 学会等名 現代史研究会第12回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 感染症と「牛」とのかかわりから
3. 学会等名 歴史が導く災害科学の新展開 先人の疫病文化に学ぶ（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 「隔離」を再考する 近代日本の感染症経験から
3. 学会等名 感染症と歴史学 コロナ時代における歴史研究の果たすべき役割をめぐって（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本における感染症流行の歴史的研究
3. 学会等名 疫病退散プロジェクト 第3回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 宮崎千穂「医療警察、感染源追求、非感染証明 ロシア帝国の中央アジアにおける 梅毒との闘い 」へのコメント
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員セミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 ハンセン病研究の新地平を切り拓く 本書の意義と課題
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会11月例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本における感染症史研究の現状と課題
3. 学会等名 専修大学社会科学研究所定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本の感染症史研究の現状と課題
3. 学会等名 医学史と社会の対話 オンラインセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 歴史資料の展示を通じて歴史を展示すること：国立歴史民俗博物館企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」の経験から
3. 学会等名 日本科学史学会第70回年会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松岡弘之, 廣川和花, 野上玲子, 高野弘之
2. 発表標題 自治会成立前後における九州療養所の「逃走」事例の考察
3. 学会等名 第96回日本ハンセン病学会学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 廣川和花, 松岡弘之, 野上玲子, 高野弘之
2. 発表標題 昭和初期における九州療養所の「軽快退所」事例の考察
3. 学会等名 第96回日本ハンセン病学会学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 日本医史学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 836
3. 書名 医学史事典	

1. 著者名 岩城 卓二、上島 享、河西 秀哉、塩出 浩之、谷川 穰、告井 幸男	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 388
3. 書名 論点・日本史学	

1. 著者名 青木歳幸, W・ミヒエル	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 377
3. 書名 天然痘との闘い 東日本の種痘	

1. 著者名 日韓歴史家会議組織委員会, 国際歴史学委員会日本国内委員会 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 公益財団法人日韓文化交流基金	5. 総ページ数 198
3. 書名 第21回日韓歴史家会議報告書「伝染病と歴史」	

1. 著者名 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 225
3. 書名 よくわかる現代科学技術史・STS	

1. 著者名 日本科学史学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 726
3. 書名 科学史事典	

1. 著者名 「性差（ジェンダー）の日本史」展示プロジェクト，国立歴史民俗博物館編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社インターナショナル	5. 総ページ数 224
3. 書名 新書版 性差（ジェンダー）の日本史	

1. 著者名 秋田茂・脇村孝平・廣川和花 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 人口と健康の世界史	

1. 著者名 国立歴史民俗博物館・横山百合子・廣川和花 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立歴史民俗博物館	5. 総ページ数 315
3. 書名 性差(ジェンダー)の日本史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------